

総 政 人 の 巧

—連載第8回—

愛知大学准教授 入江 容子さん

同志社大学大学院生 加藤 洋平さん

～実体験から始まった行政組織研究～

インタビュアー 大空 正弘(博士前期課程2009年度生)

自治体組織への疑問

【大空】同志社大学大学院総合政策科学研究科を卒業された方々にお話を伺う「総政人の巧」。第8回目は愛知大学法学部准教授の入江容子さんにお話を伺います。なお今回は学部生時代に愛知大学の入江ゼミに所属しておられた加藤洋平さんにもご出席頂いてお話を伺います。

入江さんは前期・後期課程を通じて公共政策コースに在籍され、真山達志先生のもとで研究をされてこられました。それでは、最初に総政に進学されたきっかけからおはなし頂きたいと思います。

【入江】私は学部を卒業してからはすぐにメーカーに就職したんですけれども、その会社で公共事業の営業を担当していたんです。そこから話すと長くなりますが、当時、水産庁が所管していた補助事業で沿岸等整備事業というのがありました。それを自治体がやるというときに私たちの会社で請け負っていたんです。会社として技術や設計図などを持っていまして、うちの部品を使って公共事業をやってくれというように。

そうやって、いろいろな自治体をまわって営業させてもらっているときに、公共事業の裏側をいろいろ垣間見ました。すでに時効だから言ってもいいとは思いますが、入札と言いつつも実際はほとんど談合ですし、それから補助事業なので申請書類を書かないといけないんですけれども、実際の行政職員は申請書類を書けない人が多かったんです。もっと言えば知識がほとんどない。メーカーの私たちに丸投げだったんですね。

私たちが事業の一から十まで企画をしていたんです。その事業では魚礁というんですがお魚のマッシュルームみたいなもので、コンクリートブロックで作られた構造物を使うんです。魚礁はピラミッド型で中に隙間があります。それを海の底に沈めると、そこに小魚が寄ってきて、その小魚を餌に寄ってくる大きな魚を育てるという事業でした。

そういった事業をしようということなんですけれども、自治体の担当職員にその知識がほとんどないんです。私たちが「どの海域のどの地点にこれこれの魚礁を入れるとどれだけの効果がありますよ」というような事業の企画から、挙句の果てには強度計算書、構造計算書、補助の申請書類まで全部作ってたんですね。そして事業を申請して成り立っていたんですけれども、ここに非常に疑問を感じたんですね。「公共事業ってこんなんでもいいのかな」と。

個人の自治体職員の方は別に悪い、能力が低いということではないんです。なぜそんなに基本的な知識がないのかなということ、話したり聞いたりしていくうちに、要は行政組織のシステムがちょっとおかしい、あるいは補助事業のあり方とか、中央地方関係がおかしいということをもつと疑問に感じ出したんですね。

ちょうどそういった、もやもやした疑問を抱えているときに、私は学部も同志社大学の法学部を卒業したので大学広報の『One purpose』が届きまして、そこに総合政策科学研究科ができたを書いてあったんですね。そこは政策を勉強するところだ、と。政策とはなにかという問題解決を志向しているを書いてあって、「これや!」と思ったんです。

既存の学問を批判するわけではないんですが、これまでの学問は、制度面が中心となっていたとか、どうも後ろ向きな気がしていたんです。それに比べて政策というのは前向きな、未来志向な学問のような気がして。私がある時に仕事の現場で抱えていた疑問というのは、政策というものを通してしっかり考えられるんじゃないかと思ったんです。できれば行政組織を中心としたおかしなことをなんとか変えたいというような野望を抱いて、そしてまだ自分にきちんとした知識がないので入学をしておいて、知識を身につけてそこから何か意見を持って書いていきたいなと思って入学しました。

行政組織論への着目

【大空】行政組織や中央地方関係、補助事業等について問題関心を持っておられたということですが、なかでも行政組織に着目されたのはどのような理由があったのでしょうか。

【入江】そうですね。中央地方関係などの問題もある中で、特に行政組織論に関心が行ったのは、私自身が会社組織にいたことが大きかったですね。学部を卒業後に就職したのがバイクのメーカーだったんです。そこでバイクの組立ラインをやられたんですよ。

普通の年だったら新入社員は1週間くらい体験するだけなんです。体験だからということで、普通はひとりでやる範囲の仕事を二人一組で半分ずつやるというように。でも、私が入った年は物凄く円高でして、バイクは輸出産業なので打撃を受けていました。そこで「君らは戦力になってもらう」ということで3ヶ月くらいみっちり組み立てラインをやったんですね。どんな車種が流れてきても対応できるというくらいにやったんです。

その時に科学的管理法を地で行くようなことがあったわけですよ。生産管理の人が横に立って、まさにストップウォッチで計って時間管理をし、目標管理もありましたし、改善活動もやったしというようなことを体験しました。そこで民間組織はこういうふうなものだということが分かったんですけども、かたや行政組織を仕事で見たときに全然そういうところがない。すごくおかし、というか疑問だったんですね。

それで両方を比べるとという視点から総政に入って、行政組織論にそういう企業組織論のようなものを応用できないかと。そういうところに興味関心がいったということですね。

研究者への道のり

【大空】なるほど、研究テーマについてもご自身のご経験から選定されたのですね。そして、総政で修士論文を書かれまして博士課程に進まれて今も研究者としてご活躍されているということですが、もともと研究者志望ということでの入学されたのですか。

【入江】一応そうだったんですけども、マスターに入ったときにはもっと漠然としていたとか、非常に楽観的とか、研究者になるのが苦しい道のりだと分かっていなかったという感じはありました。それが、マスターを終わるときの選択肢でドクターに行くかどうか、というときに指導教授の真山先生にどうすべきかと相談して、道を指し示していただいたんです。もし研究者に本当になるならその他のことはすべて捨てて、とにかく一本でいけ、と。この政策の分野については全国的に政策系の大学が新しく出てきた時期でもあったので、頑張れば就職もできるよ、と。芽がない分野ではないよ、と励ましていただいて、研究者という道を決めました。ですから、研究者を真剣に考えだしたのはドクターに入る前でしたね。

【大空】そういったところから、研究者の道を決められたということですね。少し話は前後するかもしれませんが、総政での学生生活のお話を伺えますか。

【入江】マスター時代は非常に不真面目でして、正直に言って、マスター時代は資格の勉強をしていました。要は迷っていたんです。二足のわらじとか、研究者というのも漠然としすぎていまして。本当になれるという実感もないし、どうやったらそこにたどり着くかというのも見えなかったし、あまりにも目標として遠かったんです。そこで、もうちょっと現実的に何かできるかなと思ったのが資格だったんです。どっちかというともマスターの時は研究者としての下準備をするよりも、そういう資格とか、迷っていた時期でしたね。本腰を入れたのはマスター

論文を書く直前から。本当に真山先生に喝を入れていただいたというか。マスター時代はあんまり熱心じゃなかったかな、と思います。

【大空】ドクターに進まれてからは研究者に向かって突き進まれたということですね。

【入江】そうですね。ドクターに入ってからはもちろんこれ一本だったんですけども、本当に苦しかったです。それこそ、先が見えないジャングルに入ってしまったな、というような感じで。研究テーマにしてもそうだし、研究方法にしてもそうだし、ゴールがどこか分からない。そういう感じがありました。研究者を目指しているマスターやドクターの方なら何となく分かってもらえるかなと思うんですけども、何をどうすれば研究者になれるのかというのがはっきりと分からないじゃないですか。論文もどれだけのものをどういうペースで書けばいいというのも分からなかったし、そういう苦しみの中でもがいていたという感じでした。

研究者としてのスタート

【大空】その後、博士論文を書かれて、研究者として愛知大学にご就職されました。研究者として本格的にスタートされたということになるかと思いますが、そこからのお話を頂戴できますか。

【入江】研究者になるかならないかというのは本当にそれまでの努力と運とタイミングが非常に大きいと思います。やはりきちんとした、できれば査読付きの論文をある程度の本数を書かないとどうしようも無いというのがあると思います。それと、人事はタイミングなので運もかなり大きいと思います。

幸いにも私は愛知大学に職を得ましたけれども、研究者というか、職を得てからの方が学ぶことはすごく多いんですね。というのは、毎日学生の方と接しているのだけれども、授業をするというのも自分の勉強にもなるし、学生の方からも思いもしなかった反応が返ってくることもあります。そういう意味で教えられることも多かったんです。だから、研究者になってからの方が本格的に研究が進むというか、それぞれの相乗効果もあったんじゃないかと思います。

院生時代は院生時代で時間がたくさんあるの

で、もがきながらいろんな知識を見つけるいい時間だと思うんですけども、仕事を始めてからは受ける刺激などが格段に変わるんですね。私は職を得られて本当によかったと思っています。研究者としてもよかったと思っています。

学会発表などもあります。これも運なんですね。自然科学系の学会というのはかなり若い研究者にも門戸が開かれていて、応募すればペーパーでの発表ができたとか、わりと大学院生だけの分科会だけがあったりするんですけども、行政系は博士課程の人や職を得たばかりの若い人が発表する機会がほとんどないんです。この点はこれから学会で変えていこうかという話にはなっていますが。そういうわけで、やっぱりご縁ですかね。ご縁があって発表の機会も与えられるということでしょうか。でも、発表の話がなんか回ってきたときにちゃんと発表できます、というようなものは持っていないといけないと思います。

学生への指導

【大空】入江さんは愛知大学で教員として活躍されています。入江ゼミからは本日参加いただいている加藤さんのような学生も輩出されているわけですが、入江ゼミではどのような授業をしておられるのですか。

【入江】私のゼミは3年生と4年生と一緒に授業をやっておりまして、1年間を通してきちんとした学術論文をとにかく書くというのを目標にしています。それはレポートでもないし、ましてやみんなのエッセイ集でもない、ちゃんとした学術論文にしてほしいと思っています。論文はどんなテーマでもいいんですけども、私が自治体行政を専門としているということもあって、自治体行政に関わるいろんな政策トピックスを選んでもらっています。

また、私としては、学生に対してあまりお仕着せの論文執筆にしたくないと思っています。学生が自分たちで自発的に問題を見つけ、問題解決に持って行ってほしい。その集大成の論文として世に問うてほしいと思っています。

ひとり1本というのはハードルが高いので、グループで1本の論文を書くんですけども、それを書くために1年間で割って振っています。

最初は基礎知識がないのでテキストで基礎知識を学んでもらって、その後自分たちの問題関心のある程度固めてもらって、そのあと論文を書くための方法論もやります。

一番大きなトピックスとしては夏の間に自分たちで論文テーマに該当するところに調査に行ってもらうんですが、これは私が総政の時に教えていただいた石田先生の教えから大きく影響を受けた部分なんです。石田先生は賃金制度がご専門なんですけれども、常々「分かったつもりで書くな。腹の底から分かって書かないと何も身にならない」とおっしゃっていたのが、すごく私は大学院時代に影響を受けたんです。「まったくその通りや」と。

特に大学院生は本ばかり読んで頭でっかちになりがちなんですけれども、かたや行政の分野を見たときに実際にきちんと解明している物ってそんなにないんですよ。実際も分からないのに問題解決っていうのはちょっとおかしな話かなど。特に若い学部生とかは現実っていうものをきちんと知ってほしいし、これから社会に出るにあたって、行政組織に関わるかどうかは別としても、社会人になる前に社会の人ときちんと応対ができるようになるというのもひとつのいい経験かなと思っています。

そういうこともありまして、自分たちで調査先を見つけてアポを取って、ちゃんと書類を送ってご連絡して調査に行きなさい、というのを課しています。それをもとに後期は調査の発表や報告をしたり論文を書いたりしていくという作業をやります。

論文を書くというのが、ちょっとうちの大学の中では厳しいというかきついというか、そういうふうに言われるところもありますが、私はそのきちんとしたものを書くことが大切だと思うんです。私も学生の書いた原稿を何回も何回も添削するんですけれども、ゼミ生が35,6人居ますので、私も倒れるかというくらいに見ます。学生みんなが5回くらい送ってきますので毎日添削して戻してというのをやるんです。私も大変ですけども、これをやることで学生も格段に文章力、構成力がつくんですね。これをやっておくと社会に出たときに困らない。企業に入っても絶対に文章は書けし、営業にしたってなんにだってそうです。そういう時にきちんとした文章が書けるという自信を持ってほしいので

論文を書いてもらっています。それを最終的に仕上げてもらって終わるという、そういうゼミをやっています。

【大空】以前、加藤さんから入江ゼミの論文集を拝見させていただきましたが、しっかりとした学術論文だったという印象を持っています。いまのお話を伺って、確かに入江さんのご指導の賜だというように感じました。

【入江】学生も最初に学術論文を書くと言っても形式も知らないんですね。注はこうやってつけるとか、参考文献はこうやって入れるとか。学生の方からすれば「なんでこんな細かいことを一々言われなあかんねん」というような感じなんですよ。でも世の中に出たら形式が一番。形式をクリアしてないものは箸にも棒にもかからないということを理解してもらうためには通らなければならないステップだと思って頑なにやっております。

【大空】本日は学部生の頃に入江ゼミに所属して、直接入江さんの指導を受けられた加藤さんにも参加していただいておりますが、加藤さんから見て入江ゼミはいかがでしたか。

【加藤】確かに厳しかったんですけど、僕はそれで文章力や論文を書く上での基礎知識のようなものを身につけることができたと思っていますし、入江先生の指導はすごくよかったです。ただ、やはりゼミ生からは先生からの厳しい指摘があったり、添削でも真っ赤になって返ってきたりするというので厳しいと言う人もいました。ですが、それだけ入江先生は細かいところまでしっかりと添削してくれていることですし、それだけ真剣に学生の書いたものを読んでくれているというのは僕は強く感じていまして、とてもいい先生だったと思っています。

【入江】私も真剣ですし、私自身がオンの部分を緩めるというのは嫌なので、学生さん自身も真剣にやってほしいと思っています。でも、その分オフはオフでちゃんと宿舎に行ったりみんな楽しく飲んだりということをやっているつもりです。

【加藤】それはすごく大きかったですね。僕もそこでオンとオフの切り替えを学べたというか、その経験でオンとオフの切り替えや使い分けが重要だということがわかりました。

【入江】私は教室の場での馴れ合いというのは

おかしいと思うんです。真剣に学問をやるんだし、教室の場ではお互いに真剣にやりあう。そのかわりいろんな不満とかあるんだったらオフで聞くよ、と。学生もいろんな不満もあるでしょうし、私ももっとラフに付き合いたい部分もありますし。学問以外にも就職のこととか友達づきあいのこととか、もっと言うと恋愛のこととか学生もいろいろ考えていますから、そういうことは教室以外のところで聞いた方がいいのかな、と思っています。

一生勉強、一生研究

【大空】なるほど。そういう指導方針で学生を教育されてきているということですか。では、これからの入江さんの展望についてお聞かせ願えますか。

【入江】そうですね、この業界に入ってしまったので思うんですけど、「休めないな、止まってられないな」という仕事だと思っています。一生勉強、一生研究ですね。もちろん学生さんがいてくれるから一生刺激を受けられると思うし、そういう中で頑張りを続けていければな、という風に思っています。将来的には研究者として自治体の組織についてのある程度固まった「これだ」というものを世に、きちんとした形で問いたいなということを思っています。

ですが、今の自治体の現場は大きな岐路に立たされているんですね。地方分権と言われて久しいわけで、最近では民主党政権になって「地域主権」と言われている。けれども、自治体が本当に何を政策手段として使っていけるか、政策資源として使っていけるかというのはまだはっきり見えないところがあるんですね。その一方で住民のニーズというのはどんどん多様化しているし、社会ニーズも複雑化しているのも、問題は深刻になってくる。公と私との境界も曖昧になってくる。すごく立ち位置が難しいのが自治体の現状だと思うんですね。

だけれども、日本の地方自治体の成り立ちというのを考えてみると、明治以降中央のその時々行政のニーズによって、例えば郡区町村編制法だとか市制町村制、それから3回の大きな大合併など、中央の行政の政策の方向性によって枠組みを決められた組織ができてきたという経

緯があるんですね。だからいきなり今までの経緯を無視して自治体はこれから地域主権だから、あなたたちだけで頑張るってやりなさいよ、といわれたところで、彼らは自分たちが好きで作った枠組みでもなければまだ義務付けとか枠付けとかがある中できつく縛られている状態で、そうそう自由にできないというジレンマみたいなところがあるんです。でも自治体として力をつけていかなければ、これから本当に生き残れないという、わりと大変な局面にいると思うので、そういう現場の人にも指針というか、方向性が見えるようなものを理論として出していただけたらな、と思っています。なかなか難しいかとは思いますが、それが希望です。

皆さんへのメッセージ

【大空】確かにこれからの自治体はこれまで以上に権限も大きくなってくると同時に責任もかかってくると思います。そういった中で自治体がどれだけの力をつけていかなければならないかというのは重要なテーマだと思います。

それでは最後になりましたが、在学生へのメッセージをお願いします。

【入江】まず、総政の在学生の皆さん全体に向けてということからお話しましょうか。私が総政に入っていちばんよかったなと思うところは、いろんな人材が集まっているところです。いろんな立場のいろんな年代のいろんな経歴の人たち。その人たちが学問を通じて自由な交流ができますよね。そういう場ってあまりないと思うんです。学部にもないし、社会に出てもないと思うんですよ。社会に出たら自分の会社組織、自分の内輪になってしまうんです。総政っていうのはそういう垣根がなくなって、年齢の垣根がなくなって、社会問題や共通の問題に関してざくばらんに話ができる場なんだと思うんです。

そういうことで総政は本当に有意義な場所だと思っていますし、そこでできた友人関係というのは今でも貴重なつながりがあります。それに、そういうところから得る刺激なども本当に自分の先々にとって大きな糧になったなと思っていますので、なるべく視野を広く持って、広く聞く耳を持って、いろんな知識を身につける

とともにいろんな人と交流を大いにしてもらいたい。人生の栄養補充期間というか、そういうふうにしてもらいたいと思っています。

また、研究者志望の人に対してですけれど、私が院生の頃に組織学会の大会に参加したんです。本当に苦しんでいたドクター時代に行ったんですけれども、その時に長年の研究に対しての学会賞を受けられた非常にベテランの研究者の方が記念の演説をされました。その時に「私はこのような賞を頂いて非常に名誉だ。私は大学院生の頃からずっとこのテーマをやってきたけれども、なぜこのテーマなのかというのをその頃から散々言われてきた。そんなテーマはまったく流行らないとか、何の意味があるのかとか言われてきた。だけれども私としてはこのテーマにとっても関心があり、研究する意味があると信じてやってきた。それがずっと続いて何十年も研究してきて今回賞をいただいた。ここには若い研究者もいるだろうから伝えたい。どんなに日の目を見ないというふうに周りから言われても信じて長く続けなさい。そうすると必ずどこかで誰かが見ていてくれる。私のように賞をいただけることもある」と。

私はそこで思わず感涙を流しました。もがいていた、苦しんでいたところですごく心の支えになったんですね。研究って出口が見えないとき、苦しいときがみんな必ずあると思うんですけれども、その時々にはアドバイスを受けながらも自分の問題関心を信じて長く続けて、頑張っていってもらえれば、と思っています。

(2010年9月23日 同志社大学博遠館にて)